

## アナトール・フランスの文学とその発想

小 住 毅 志

### I

ロココ芸術とロマン主義芸術が創造主体とその発露に於て明白な相違点を持っている如く、Anatole France を懷疑論的エピキュリアンや印象批評的自然主義者として片付けるのは少々性急であろう。

Anatole France は1844年から1924年の間在命し、高踏派、自然主義派、類唐派等の文芸思潮の洗礼を受け、キリスト教主義、懷疑主義、ディレクタンティズムに支えられて、詩、小説等の創作、社会批評、思想面での政治参加等その活躍は多岐に亘っている。従って、必然的に、種々の研究、評価が加えられてくることになる。

この文学者とその所産に対する研究は、主として、次の分野に整理出来る。

Claude Aveline を中心とするこの作家の社会活動の面、Jacques Suffel を中心とする一般的伝記の面、Vandegans を中心とする作品構造の分析の面、Bancquart を中心とする批評家、論争家としての面、François Mauriac を中心とする諷刺家、物語作家としての面、Jean Levaillant を中心とする知性的構造、思想史的面。

構造分析、文芸思潮上の位置付けに関しては、既に、種々の試みが行なわれているが、本稿に於ては、これらの試みの奥にある作品創造の作動要因を内質的に解明しておく。

Jules Lemaitre はAnatole France の文学を《une des résultantes les plus riches de tout le travail intellectuelle ce siècle》と定義付けているが、この作家の場合、知的省察の多様性と鋭敏性が顕在化している。この特性には、当然、時代、風俗、伝記の三要素との相関的關係が含まれている。文学は世代の子であると同時に、世代は文学の子である。その反面、世代とは別の次元に於て、創作主体の文学的認識内容、意識作用の独自性が控えている。

文学者、Anatole France は人生の指標を次のように省察している。

《Vivre d'abord objectivement pour autrui, afin de, vivre ensuite subjectivement dans autrui et pour autrui, ou, d'une manière plus générale, connaître, aimer et servir l'humanité》<sup>1)</sup>

彼は人間性を尊重し、人間、人生、社会を省察し続け、創作その他の社会活動を通じて

1) A. France : œuvres complètes d'Anatole France t.xvii, Calmann-Lévy, 1947, P.321

人間性を発揮している。

先ず、これを現象的に辿ってみよう。

彼の作品群は次の如く分類出来る。

Livre de mon ami (1885) , Pierre de Nozière (1899) , Le Petit Pierre (1919) , La Vie en fleur (1922) , 等の幼年時代の追憶, Thais (1890) に於けるmadame de Caillavetとの恋愛沙汰の投影, Sur la Pierre Blanche (1905) , Vie de Jeanne d'Arc (1908) , Les Dieux ont Soif (1912) 等の政治生活の混入。

これを観念の面から集約すれば, Crime de Sylvestre Bonnard (1879) は《慈愛》を, Thaisは《情念》を, Opinions de Jérôme de Coignard (1893) は《諷刺》を呈示している。

これを登場人物の面から集約すれば, Le Petit Pierre, Jean Servien, Sylvestre Bonnard等の系譜が出来上がるが, これを逐一 Anatole France に准えても, 危険性を帯びた仮想世界が捏造されるだけで, 何ら実体を解明することにはならない。

Anatole France の文学遍歴の端は, 読書や詩作に耽ったパリの古本屋の家庭で育った幼年時代, 具体的には1866年 Alphonse Lemerreとの邂逅によって Leconte de Lisle, Verlaine, Mallarmée 等と交わったことにある。

幼年時代の人物を描いた作品にLivre de mon amiがあり, この人物がAnatole France の全貌とは言えないにしても, このような人間存在が作者の意識の中に生きていたことは注目に価する。

《J'avais autant d'audace dans l'esprit que de timidité dans les manières. D'ordinaire, l'intelligence des jeunes gens est rude. La mienne était inflexible. Je croyais posséder la vérité. J'étais violent et révolutionnaire, quand j'étais seul.》<sup>2)</sup>

ここには, 見かけは臆病だが, 真理を見つめ, 真理を掴み, 真理を曲げない依古地な人間が呈示されている。

1861年, Théâtre Françaisの女優に恋情を寄せ破れていることがこの作家の女性観に何らかの啓示を与えたらしく, サロンを中心とした種々の女性遍歴を辿っている。

1868年, 自由主義的な共和制理念に共鳴し, Chassin の結社に入ってから, ドレフュス事件に関与し, 人間性の外的昇華を次の如く希求している。

《Puisse une ère de bonheur s'ouvrir pour le genre humain!》<sup>3)</sup>

高踏派との交わりは, Les poèmes dorés (1873) を生み, エピキュリアンの要素と美

2) A・France: Livre de mon ami, Calmann-Lévy, 1885, P.177-178

3) A・France: Sur la Pierre Blanche, Calmann-Lévy, 1905, P.63

意識に目覚めているが、所謂、L’Affaire du Parnasseを惹き起し、この派と訣別している。

この高踏派との訣別事由は、高踏派、殊に、Leconte de Lisleの詩の形而上学的仮設を否定し、客観的な詩の必要性を主張したと言われる。

Bancquartは自己の調査、研究の結果を次のように述べている。

《Il faut, d’après France, renoncer aux hypothèses métaphysiques, tout en chantant les lois d’ensemble de la nature. En somme, la poésie selon le cœur de France est à la fois familière et cosmogonique.<sup>4)</sup>

論争家としてのAnatole Franceは、自然主義、及び、Emile Zolaをも次のように非難している。

《J’avoue que la pureté de M.Zola me semble fort méritoire. Elle lui coûte cher: il l’a payée de tout son talent……On l’avait déjà averti qu’il tombait dans le chimérique et le faux. Peine perdu!》

Son ignorance du monde est prodieuse, et comme il n’a pas de philosophie, il tombe à chaque instant dans l’absurde et dans le monstrueux. Ce chef de l’école naturaliste offense à tout moment la nature.》<sup>5)</sup>

このようなAnatole Franceの自然主義に対する反抗を、Bancquartは、常識的に、芸術や世界を科学法則の中に繰り入れることの危険性に対する警鐘と受け取るに止っている。

蓋し、ここでは、Anatole Franceと自然主義文学との現実と自然に対する視線の相違に注目しなければならない。

自然主義文学の視線は、スヴオ・ロマンの文学の所謂<カメラ・アイ>を目指す視線の出現により、その内部矛盾が露かれているが、Anatole Franceはこれを反対の方向から攻撃しているのである。

Anatole Franceは人間の認識の限界を次の如く定義付けている。

《Tout est mystère dans l’homme et nous pouvons rien connaître de ce qui n’est pas l’homme.

Voilà la science humaine.》<sup>6)</sup>

当時の自然主義文学は、絶対的科学精神で以って、一切を科学的正確さで見つめ、一切を科学的正確さで分析出来ると信じていたが、Anatole Franceは人間の認識は人間は人

4) Bancquart: Anatole France polémiste, A・G・Nizet, 1962, P.

5) A・France: Vie littéraire t.Ⅱ, Calmann-Lévy, 1889, P.250—251

6) A・France: Vie littéraire t.Ⅱ, Calmann-Lévy, 1889, P.70

間を越えないことを信奉しており、当然、自己の視線の人間的限界を認めていたことになる。

ここに両者の対立の必然性がある。また、ここから、Anatole France の視線に人間の感情が内含される隙間が生じ、彼の文学に於てイマジユが大きな役割を果し、彼の印象批評に走りがちな性向の原因が生じている。

即ち、この相剋に対するこの作家の自意識は、幼年時代に育まれた環境と自我と相俟って、その後の諸作品に現れてるイマージュと相対主義思想とエピキュリスムに関連し、Anatole France の文学を完成している。

更に、作品現象面から定義付けるならば、彼の文学の本質は、作品 *Thaïs* に於ける Paphnuce の足掻きと作品 *Sur la Pierre Blanche* に於ける桃源境の幻想と作品 *Crime de Sylvestre Bonnard* に於ける Bonnard 教授の誠実、これらの象徴的三円の抽く軌跡の重複部の中にある。

作品 *Thaïs* に於ては、善良な修道僧 Paphnuce は色香を振り撒いて人心を惑わす *Thaïs* をキリスト教の力で以って善導しようとするが、却って、彼女の肉体の美の虜となってしまう。彼の心中は信仰心に代って、肉体の歓喜、嫉妬の悪意、所有の悦楽が巣くう。*Thaïs* は真の愛にも目覚めキリスト教に信仰を寄せるが、Paphnuce は美と情念を棄て切れず、*Thaïs* の屍を食ろうとする畜獣に近似する。

作品 *Sur la Pierre Blanche* に於ては、日露戦争の最中、ローマにて五人のフランス人と一人のイタリア人が、発掘された古代ローマのフォーラムを散策しながら、過去、現在を科学的に批判し、より良い時代が科学と思想の必然から生れることを予言する。

作品 *Crime de Sylvestre Bonnard* に於ては、Bonnard 教授が、何らの魂胆もなく、誠実な自己の心の命じるままに、屋根裏の貧しい女性に薪を分け与え、若かりし頃の恋人の娘を慈愛を込めて育て上げ、自分の愛弟子とこの娘との縁を結んでやっている。

この重複部の中にこそ、人間性を認識し、人間性を愛し、人間性に奉仕することの真の意義と、ユマニズムの精髓がある。

## Ⅱ

G・Auguste Masson はこの作家を《critique de l'univers》と評しているが、老大な著作に支えられたその内面世界は広汎にして多様性を帯び、文学的認識のメカニズムは複雑を極めている。

Anatole France は、人間、人生、社会に対する自己の省察を次のように定義付けている。

《être vraiment humain, c'est dégager les pensées sous les formes, qui n'en

sont que les symboles; c'est pénétrer dans les âmes et saisir l'esprit des choses.》<sup>7)</sup>

彼は思想家であると同時に芸術家である。

彼の代表作の一つとされる *Thaïs* (1890) に於ても、懷疑論的哲学思想と情念華美が巧みに調和している。

思想の枠を越えて昇華する情念と道徳的見地に立った思想との織りなす綾が描き出されている。これは、究極的には、人間の本性の二面性に辿りつくことだが、Anatole France の場合、両者共々強調されており、しかも、両者が作品の中で調和乃至混入される所に特質がある。

*Thaïs* 中の Paphnuce は、自己の立場を次のように語っている。

《……Cette joie lamentable entraîne le pêcheur dans toutes sortes de désordres. Mais parfois aussi ces troubles de l'âme et des sens nous jettent dans une tristesse impie, plus funeste mille fois que la joie.》<sup>8)</sup>

この問題は、更に、人間存在に於ける観念と感覚、思想と感情との関連にまで波及していつている。

この二面性を余りにも見つめ過ぎた Anatole France は、自己の思索する営みの中から自己及び人間に対する懷疑思想を導き出す。認識する彼の所産が既に彼自身及び人間を懷疑し、嘲笑している。

《L'homme n'est pas fait pour découvrir son origine et ses fins.

Il est fait pour sentir la joie et la douleur, non pour savoir et connaître.》<sup>9)</sup>

彼が思想と感情の相剋に悩み、人間存在を両者の相剋の存在として懷疑論的に受け取る際に、彼の思想の中に一見矛盾と思われる面が生じてくる。

彼の作品の中に登場する M. Bergeret は、学問や思想が人間性にとって有益であると同時に、無知の効用の面があることを指摘しているのも、このような背景があるからである。人間存在の中の思想と感情の矛盾撞着に直面し、これを懷疑論的諷刺的に誠実に表現することから、無知の効用が必然的に導き出されてくるのであって、Anatole France がこの面だけを絶対的に信奉したのではなく、人間存在を逆説的に認識しているだけである。

《L'ignorance est la condition nécessaire, je ne dis pas du bonheur, mais de l'existence même. Si nous savions tout, nous ne pourrions pas supporter la vie une heure.》<sup>10)</sup>

7) A. France: *Vie littéraire t. II*, Calmann-Lévy, 1889, P.344

8) A. France: *Thaïs*, Calmann-Lévy, 1966, P.213

9) A. France: *Dernières pages inédites*, Calmann-Lévy, 1925, P.41

10) A. France: *Jardin d'épicure*, Calmann-Lévy, 1894, P.26

この言葉は単なる戯れ言ではなく、人間性を認識するために見つめ、諸々のことを欲し悩む人間存在の悲慘を知った者の溜息である。また、同時に、人間共の衆愚を嘲笑する洞察家の本音でもある。

人間に於ける思想と感情の相剋は、Anatole France に於ては巧妙に調和している。即ち、人間存在を純粹に抽象的思性の面に於てだけでなく、世態人情、換言すると、生活の様相の面からも洞察している。原理的抽象的人間のみならず、現実の人生を生活する人間にも彼の視線が注がれている。そして、この視線自体が、前述した如く、その認識が人間の枠を越えない人間的なものであり、これが相対主義思想に繰り入れられ、懷疑論的諷刺的に表現されている所に彼の文学の特異性がある。

人間が生活し、それによって経験を集積し、直観を生み出し、それが論理操作につながる全過程が、Anatole France の文学の中にある。この間の事情が、彼の文学に対する評価の多様性の生じる起因となっている。

彼の思想と感情の調和の技法は、真理の人間性の強調の段階で成功している。

作品 *Thaïs* の中で *Zénothémis* は次のように述べている。

《……la science et la méditation ne sont que les premiers degrés de la connaissance et que l'extase seule conduit aux vérités éternelles……》<sup>11)</sup>

この宗教的《extase》の可否はともかく、Anatole France は、人間存在に於ける感情の力を認め、思想のみならず感情をも真理に結び付けようとしている。真理を認識し、真理を行動に移すのは、感情によっても動かされる生身の人間である。このことは、人間が本能的になるということではなく、本能—自由—理性—規律の人間の意識の輪廻の中で、学識や冥想によって把握された真理を人間の永遠の理想の方向に、人間存在に於ける感情が推進力として働きかけるということである。

この間の事情をAnatole Franceは次のように付言している。

《, les vérités découvertes par l'intelligence demeurent stériles. Le coeur est seul capable de féconder ses rêves.

Il verse la vie dans tout ce qu'il aime. C'est par le sentiment que les semences du bien sont jettes sur le monde.》<sup>12)</sup>

真理を善導し価値あらしめるものは、人間の善なる性情であることを強調している。

即ち、真理が人間の思想と感情との調和を得ることによって、始めて人生に於て真理が有意義になり充実化することを強調しているのである。

Anatole France は人間を現実の相に於て観察し、分析し、原理の中に繰り入れた人で

11) A・France: *Thaïs*, Calmann-Lévy, 1966, P.114

12) A・France: *Opinions de Jérôme Coignard*, Calmann-Lévy, 1893, P.252

ある。彼は従来の普遍的抽象的原理の枠に当て嵌めてだけ人間を把握するのではない。彼は既成の原理の枠からはみ出た部分も回収し、新たに原理に繰り入れようとする。

この作業は、人間的な視線で以って、しかも、何らの現実破壊の行為を伴わないで続けられる。

このような意味合いから、Anatole France は認識主体上の自由と認識内容上の規律の特異性を持っている。この二大特質こそが彼の文学の出発点となっており、彼の文学の内面世界を形成し、作品現象上の種々の特異性に波及していつている。

このような認識方法をとる Anatole France にとって、世界はどのように受けとめられたのであろうか。

この作家にあっては、人間の認識は人間を越えないのであり、従って、宇宙自体は人間にとって神秘であり、人間が知覚し、認識した宇宙しか人間には受け止められない。人間の認識する宇宙は人間が知覚し、認識する領域の中にのみ止り、人間の認識を越えた宇宙自体の他の本性は、人間にとって全く未知なのである。これは哲学の分野で言う《物自体》の想定と多少趣を同じくしているが、Anatole France の場合、これが相対主義的無常観とイマージュを媒介とした人生の夢幻美に結び付いている。

Histoire comique (1903) の中で、Socrate は次の如く述べている。

《-----L'ordre dans lequel roulent les choses dans les abîmes de l'univers nous est inconnu. Nous ne connaissons que l'ordre de nos perceptions.》<sup>13)</sup>

ここから、Anatole France の文学は、相対主義思想、主観的人生観、イマージュの権利を導き出している。

人間の認識が人間を越えず、宇宙の深淵の中で事物がめぐる秩序が人間にとって未知である所から、この作家独特の理性の限界の面が生じ、この時点に於て、感情とイマージュが結託して彼の中の快楽主義思想を唆している。更に、この快楽主義思想の奥底にはユマニズムが控え、先端には美意識が纏い付いている。Anatole France は決して理性を否定しているのではないが、このような意味合いから、主観的なイマージュの権利を主張している。彼は相対主義思想に走る余り一見矛盾的な言辭を吐いているが、これも人の意表を突く論理的背景があればこそ、巷間の俗説と同一視される危険性を免れている。

彼はイマージュの権利を主張して次のように述べている。

《-----J'ai cru du moins à la relativité des choses et à la succession des phénomènes (-----) Pour aimer et pour souffrir en ce monde; il n'est pas besoin que leur objectivité soit démontrée.》<sup>14)</sup>

13) A・France: Histoire comique, Calmann|Lévy, 1925, P.235

14) A・France: Vie littéraire t.Ⅲ, Calmann|Lévy, 1891, P.368

人間は、現実の生活に於て、イマージュによって惑わされることがある。人間は、自己の持つイマージュによって、事象に対して種々の感情や印象を持ち、事象を実態から離れて受け止めることがある。人間は、魔術にトリックがあることを知っていながらそれに魅せられ、一片の訃報を手にして実態以上に想像を逞しくすることがある。更に、この作家にあっては、この面の上に快樂主義思想が作用し、その結果生じたものが《イマージュだけで充分》な世界である。これは理性と本質的に性格を異にする感情とイマージュのなせる術であるが、この作家は人間存在の二面性の存在を強調しているのであって、真理や理性を否定しているのではない。

Anatole France にあっては、《connaître, aimer et servir l'humanité》が関心事であり、《Je croyais posséder la vérité》と咳く少年に懷疑思想を付加し、旧来の真理を再検討しようとするが、その認識自体も《-----nous pouvons rien connaître de ce qui n'est pas l'homme》という認識の人間性の限界を意識している。

更に、真理を掴むべく認識する人間に対して、真理の尊厳を確認するとともに、《-----la vérité est le plus souvent exposée à périr obscurément sous le mépris ou l'injure.》と警告し、理性によってこれを救済することの必要性を暗示している。

このような認識構造上の輪廻の中に自己矛盾が発生することを恐れて、Anatole France は真理を二種類に分割し、本質把握を認識を越えた神秘主義に追いやっている。

《C'est une grande erreur de croire que les vérités scientifiques diffèrent essentiellement des vérités vulgaires. Elle n'en diffèrent que par l'étendue et la précision.

Au point de vue pratique, c'est là une différence considérable.

Mais il ne faut pas oublier que l'observation du savant s'arrête à l'apparence et au phénomène, sans jamais pouvoir pénétrer la substance ni rien savoir de la véritable nature des choses.

Un œil armé du microscope n'en est pas moins un œil humain.

Il voit plus que les autres yeux, il ne voit pas autrement.

Le savant multiplie les rapports de l'homme avec la nature, mais il lui est impossible de modifier en rien le caractère essentiel de ces rapports. Il voit comment se produisent certains phénomènes qui nous échappent, mais il lui est interdit, aussi bien qu'à nous, de rechercher pourquoi ils se produisent.》<sup>15)</sup>

このような神秘主義からして、Anatole France は精神と物質、人間と動物、科学と宗教の問題を導き出している。

15) A・France Jardin d'épicure, Calmann-Lévy, 1894, P.41



この作家は、人間的な視線を以って、人間、人生、社会を認識し、その真理を把握しようとする。また、事象を認識するのは精神であり、この作家によれば、事物がめぐる秩序は人間にとって未知であるから、精神が認識するのは人間の知覚の秩序の中にのみ限られ、精神が認識した物質は人間の知覚の秩序の中の人間的な物質でしかなく、精神と物質は本質的に垂離していることになる。即ち、顕微鏡の中で捉えた物質も人間的な視線で以って人間的に認識された人間的な物質であることには変らないのであり、物質のメカニズムを解明し得るとしても、それは人間の認識の範囲内にあるメカニズムについてであり、そのメカニズムの存在理由さえも知ることが出来ないということである。

この面から、Anatole France の文学に神秘主義や宗教的問題が特に持ち込まれることになるのだが、更に、精神と物質との本質的垂離からして、両者を相対主義的立場から見つめ、両者に対等の権利を与え、人生に対する両者の働きかけの存在を確認することになる。

即ち、精神が人間を包み、精神が人間の中において、人生を決定付けると同時に、物質も人間を包み、人間の中に入り込み、人間の意志を決定付けると主張している。人間の自由意志は精神が決定を下すとともに、物質がこれを条件付けるとするのである。

彼は精神の基盤が物質であることを次のように述べている。

《Tous nos mouvements, causés par des mouvements antérieurs de la matière, sont soumis aux lois qui gouvernent les forces cosmiques, et la mécanique humaine n'est qu'un cas particulier de la mécanique universelle.》<sup>16)</sup>

精神と物質との関係に対するこのような省察、人間の認識の有限性の設定は、反面に於て、Anatole France を人生に対する夢幻観、自然自体との垂離に追いやっている。

人生が思想や理性のみならず感情やイマージュの跳躍する夢幻の場として受け取ることが人間に許す面を生ぜしめ、客体として種々の現象を持つ自然よりも人間の認識の中に繰り入れられた自然を重視することになる。彼の自然観の特異性は Jean Levaillant も指摘しているが、この指摘は、Anatole France が大地そのものと密接に接触しておらず、彼の描く自然は《notion》であり、《l'image d'un destin》である点を突いている。

次に、人間と動物との関連に対しても、相対主義思想と懐疑思想で以って、独特の面を強調してみせる。彼の文学の基調は飽くまでも Rabelais から受け継いだ Sylvestre Bonnard 教授の《悲愛》に象徴されるユマニズムであるが、現実生活する人間の実態を見つめる余り、人間を悲観的に受けとり、崇高なユマニズムへの志向への反面、人間と動物との近似性にも目を向けることになる。

彼によれば、人間と動物は、外界を認識するための生理的器官が殆んど類似しているの

16) A・France: Histoire comique, Calmann Lévy, 1925, P.126

であり、動物は人間のそれと同種だが稍偏狭な理性を持っている。即ち、人間と動物の認識作用の類似性を生理的条件の面で捉えているのであって、人間の認識の所産としての精神のメカニズム、換言すれば、論理とその操作の面と相對することになり、ここにも彼の神秘主義が登場することになる。

人間の現実の悲惨を目にするあまり人間を動物と類似視する彼の文学は、この生理的条件のみならず、人間の理性の不完全さにも論拠を得ようとしている。即ち、人間の理性はその所産の原理の面に於いては絶対であっても、その存在根拠の面に於いては不定であることを主張している。

彼は遺稿の中で次のように述べている。

《Quant à notre raison, c'est une chose vague, indéfinie, incertaine, confuse, changeante, variable selon les personnes, variable dans un nome individu, selon les années, les jours, les heures, qui s'allume et s'éteint tout à coup, et ne jette que trouble et contrariétés.》<sup>17)</sup>

この諷刺的懷疑的表現の中で彼の意味していることは、人間存在に於いて理性と感性が共存し、人間が人生を生きる際に、或る時はこの両者が互いに協力しあい、或る時はこの両者が互いに反撥しあう作用である。この作用に即して理性を捉えれば、理性は曖昧然として不安定なものに見え、混乱と矛盾を惹起すものに見えてくる。現実の人生を生活している人間を観察すれば、理性のみが絶対的にこの人間を支配しているのではなく、この人間は感情によっても動かされており、従って、この人間に対する理性の作用は時々によって異なり、人によって異なり、時間によって異なることが分る。この人生の洞察家はこの点を指摘しているのである。

彼は、当然、人生にとって理性が必要であり、真理を把握する際の理性の効能を認め、理性の志向する所はユマニズムであることを識っている。それが故にこそ、彼は人間を《animal raisonnable》と定義付けることを拒否している。彼は人間と動物を同一視したのではなく、類似視したのである。従って、彼の文学は人間と動物との類似性を洞察するに止り、人間の中から獣性を発き立て積極的に人間を動物に還元しようとした自然主義文学とは大きな差異を持っている。

Anatole France は、現実の人間の悲惨を観察し、人間と動物の類似性を発見し、これを更に止揚しようとする。

《Espérons, non point en l'humamité qui, malgré d'augustes effort, n'a pas détruit le mal en ce monde, espérons dans ces êtres inconcevables qui sortiront un jour de l'homme, comme l'homme est sorti de la brute. Saluons ces génies

17) A・France: Dernières pages inédites, Calmann-Lévy, 1925, P.58

ies futurs.》<sup>18)</sup>

宗教と科学に関しては、科学の絶対性に対して懐疑を持ち、宗教的な《extase》の価値を高く評している。これは宗教を人間的な次元に還元することによって成功している。

この宗教の人間化を社会現象に即して考察することによって、この作家は反キリスト教的立場に立つ。現代社会の現象を洞察すると、現代社会に於て宗教の果せる役割はかなり制限されてくるものと考えられてくる。中世の名残りの面がキリスト教主義に残存していることを彼は強く反対し、現代社会の進歩に害を及ぼしていることを彼は強く主張する。

この作家は、宗教の厳格主義を嘲笑し、科学精神の方法的導入とユマニズムの必要性を指摘している。

このような認識方法をとる Anatole France は人生自体をどのように洞察したのであろうか。

人間は自己を洞察し、人間の悲惨を知り、ユマニズムに志向して、悲惨から脱出することを試み、それ故に人間は苦悩する。

悲惨は人間の性格を作り、人生を整える。

ここに人間の尊厳の根拠がある。更に、彼にとって、人間の悲惨に目をふさぎ、苦悩しない作家は真の作家ではない。これが彼の作家としての存在の正当性である。

彼にとっては、この苦悩こそ人間の尊厳の根拠であると同時に、地球の尊厳の根拠でもある。

《La souffrance! quelle divine méconnue! Nous lui devons tout ce qu'il y a de bon en nous, tout ce qui donne du prix à la vie; nous lui devons la pitié nous lui devons le courage, nous lui devons toutes les vertus. La terre n'est qu'un grain de sable dans le désert infini des mondes. Mais, si l'on ne souffre que sur la terre, elle est plus grande que tout le reste du monde.》<sup>19)</sup>

先ず、これを愛情の観点から捉えることにする。

Anatole France の愛情はユマニズムに立脚している。

人間に対する愛情は、人間の悲惨を前にした時、《慈愛》に類似した《憐憫》に変容する。彼は人間に対して《憐憫》を抱いていたが故に、人間の内面を発き、これを《諷刺》してみせた。彼の逆説の論理の背景はここにある。更に、この愛情が人生自体の次元に還元すると様々な面を生み出す。これは豊かなイマージュを伴い、宗教や肉体と関連し合い、悪魔主義的面をも生み出す。

愛情には、崇高な理念を志向する面と肉欲に支えられた獣性へ志向する面とがあり、こ

18) A・France: Jardind'épicurD, Calmann-Lévy, 1894, P.115—116

19) A・France: Jardin d'épiculture, Calmann-Lévy, 1894, P.43

の両者の対立が彼の作品の中に強く刻み込まれている。更に、獣性の面が昂じれば、罪の甘美さの意識に辿りつき、理念の面が昂じられれば、宗教的昇華の意識に辿りついている。更に、彼は愛情の華美と推進力の面に注目し、この推進力がユマニズムと結び付いた時に、人間が進歩することを主張している。これは、愛情の推進力が思想を善導し、ユマニズムを完成することを意味している。

この反面、Anatole France の文学には、《苦悩》に支えられて人間に共通の普遍的理念に志向してユマニズムと結び付く面がある。彼のこの面の最も顕在化したのは、ドレフュス事件であった。Maurice Barrès やCharles Maurras等の旧来の価値観念の保存の立場に対して、寛大な人道主義的な心情を以って軍国主義に対して思想的に反抗している。更に、総ゆる社会階級や俗人にも賞讃すべき点を見つけようとしている。即ち、現実—悲惨—苦悩—寛容の輪廻があり、人間に同情を寄せている。人間が自己のために合理的に作成した神聖な法規を犯し、労働よりも戦争を好み、互いに助け合うより殺戮し合うことを嘲笑している。その結果生じたのが、*Sur la Pierre Blanche* の中で 夢想された《Fédération européenne》である。これこそ、ラブレー流のユマニズムと社会主義思想とを取り入れたものである。彼の文学に於ては、社会に外化する際に、先ず現在の人間の悲惨を見つめ、序で過去を見つめ、相対主義的に未来を予見するという形をとっている。そして、このことは、《自由》と《正義》と《慈愛》の三つの精神と科学の援用によって可能であることを仄かしている。

即ち、Anatole France の文学は、個人の欲望と社会全体の調和、愛情とエピキュリズムを持っている。

以上、列記した彼の特異な文学世界は、これまた、特異な表現方法をとっているので、この面を検討する。

先ず、文学世界と表現をつなぐものとしてのイマージュの作用は、彼の文学に於て重要な役割を果たしている。

このイマージュは、認識作用、情念の推進力、理想郷の幻想と結び付いている。

認識主体が旧来の論理の形骸の枠を破って自由に認識するためにはイマージュの奔放な跳躍と援用が必要であり、思想と感情が互いに相手を尊重し合うためには人間の理念へ志向するイマージュが必要であり、情念が自由奔放に拡がり推進力を身につけるためにもイマージュが必要であり、対象を自由に捉え適確に表現するためにもイマージュが必要であった。彼の文学にあっては、イマージュは、理想郷幻想に辿りつく思想の面に働きかけていると同時に、審美的官能的陶醉の面にも働きかけている。

更に、彼によれば、思想と感情との調和を目指す人間にとって、一面に於いては、実在と表象を同一視して人生を生きることも許される。彼が《En fait, réalités et apparen

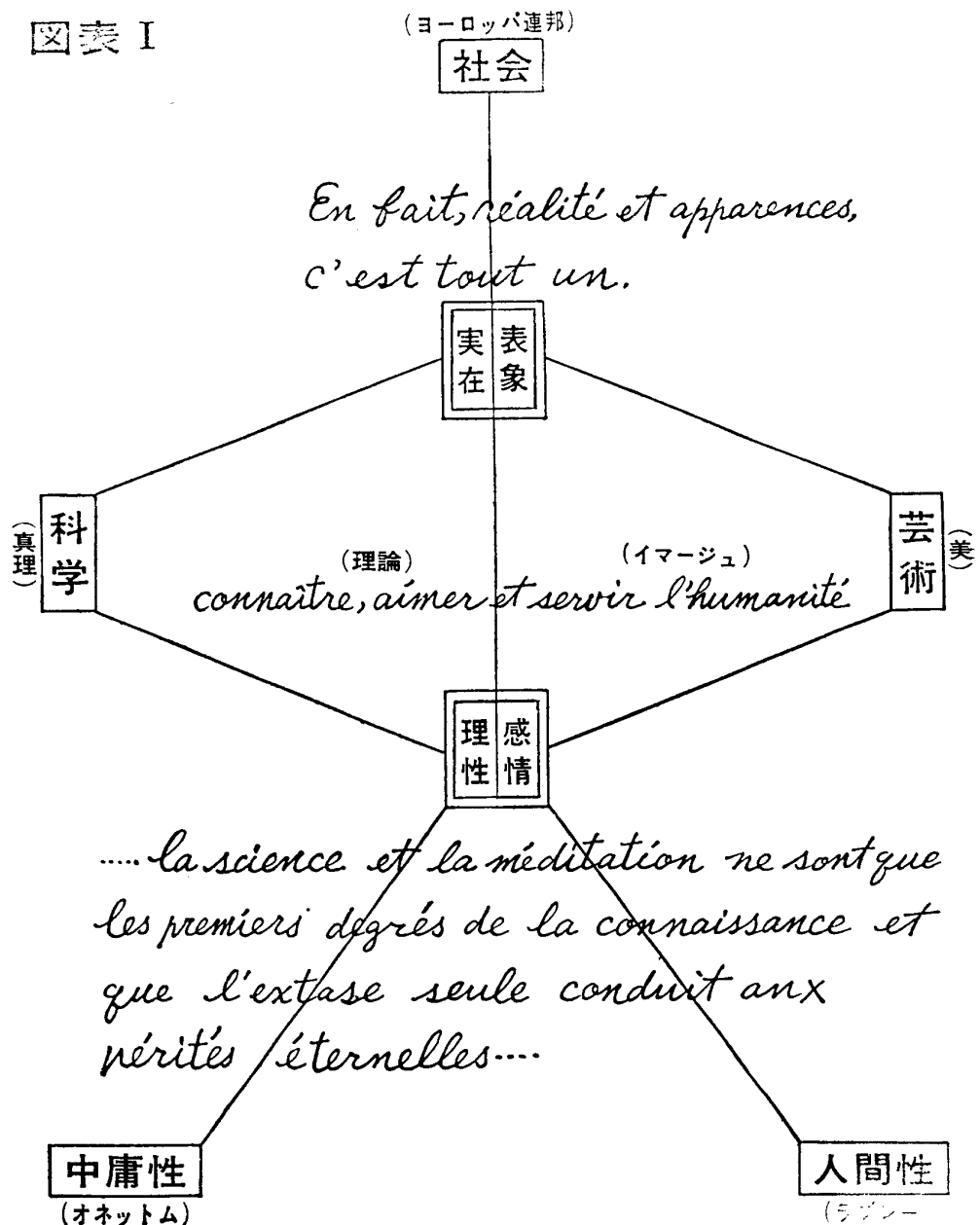
ces, c'est tout un.》と敢えて断言しているのも、このような意味合いからである。

かくして、彼は豊富なイメージを駆使して表現を試みるが、殆んど直叙形式をとらない。

《Plus je songe à la vie humaine, plus je crois qu'il faut ni donner pour témoins et pour juges l'ironie et la Pitié, 》<sup>20)</sup>

《諷刺》と《憐憫》は、対象の秘部や不正を発くためのより良き手段である。この背後には、暗示性に支えられた道徳意識とディレツタンティズムがある。

図表 I



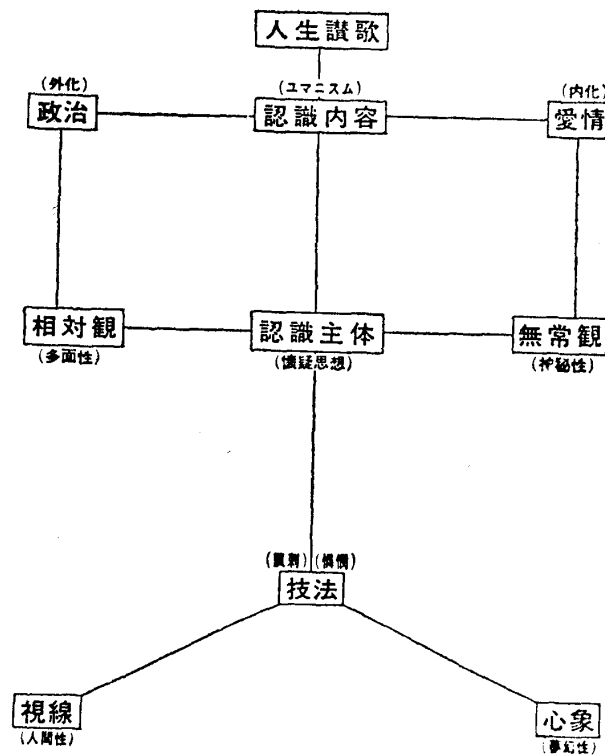
20) A・France: Jardin d'épiqueure, Clann-Lévy, 1894, P.94

Anatole France は、人生を科学に還元することの有限性を知っていたし、人間の悲惨に目を閉じたまま夢想することの無意味さを知っていた。この特性が、彼のユマニズムの文学を支えている。

最後に、Anatole France の文学の内面世界とその精神のメカニズムを上述の内容に従って図表してみる。

図表Ⅰは認識内容に関する解明であり、図表Ⅱは認識方法に関する解明である。

図表Ⅱ



### Ⅲ

Anatole France にとって、宇宙とは次の如きものであった。

《Les mondes meurent, puisqu'il naissent. Il en naît, il en meurt sans cesse  
Et la cration, toujours imparfaite, se poursuit dans d'incessantes métamor-  
ses.》<sup>21)</sup>

人間が万物の流転を認識し、万物の存在の意義の空無なることを認識した時、無常観が生れる。認識主体が自己の認識の限界に足搔き、認識内容上に矛盾が生じるとき、認識主体は神秘主義に頼ろうとし、悲観主義の深淵を垣間見る。更に、相対主義思想に支えられ

21) A・France『Jardin d'épicure』, Caimann-Lévy, 1894, P. 4

て、万物の流転に直面し、万物の存在意義の空しさを悟り、認識する自己の営みの徒勞を認識主体が悟る時、認識主体に無常観が生れる。この人生の洞察家は、《l'immensité effrayante de la vie et des choses》の意識に目覚めていた。

Antole France は自己の文学の基調の一つが無常観であることを次の如く暴露している。

《J'ai pris tout enfant un profond sentiment de l'écoulement des choses et du néant de tout. J'ai deviné que les êtres n'étaient pas que des images changeantes dans l'universelle illusion. J'ai été dès lors enclin à la tristesse, à la douceur et à la pitié.》<sup>22)</sup>

即ち、彼の文学に於いては、悲哀と温雅と憐憫は無常観のなせるわざであり、悲惨—苦悩—憐憫—共感—慈愛—快樂、の輪廻の奥底には無常観が潜んでいることになる。

無常観で以って、世界を見つめ、人間の悲惨に直面し、人間に共感を抱き、人間に対して弱々しい慈愛を注ぎ、人間をエピキュールの園に導こうとする。

彼の文学の奥底にある無常観が人間性回復の営みと結び付く時、無常観は弱々しくも見受けられる温雅で寛大なユマニズムを生み出す。更に、彼の無常観は、一切の無の意識から自己を滅却してしまう日本的乃至東洋的無常観とは性格を異にしている。自我を宇宙や自然に譲り渡さず、認識主体の限界を知り、認識内容上の矛盾に悩みながらも、主体性を失わずに、積極的に《エピキュールの園》に近づこうとする。

彼の無常観は、行雲流水の如く無為に人生を過すのではなく理想郷へ志向するのだから理性的方法的無常観である。この無常観は懷疑主義思想と相對主義思想に支えられている。従って何らの躊躇もなく自我を強力に外化し、積極的行動と結び付いたアンガジュマンの文学とも性格を異にしており、彼が書齋の文学者と評される一面が生じている。

彼の文学にあっては、無常観を基調に相對主義思想と懷疑主義思想が世界と人間を覆っているため、思想が行動にスムーズに結び付かない。

更に、彼の無常観は、《慈愛》と《憐憫》を以って理想郷を信じていたが故に、不信の時代に於ける人間疎外の文学とも距離を保っている。

彼の無常観は、世界と人間の洞察から生じたものであり、人間を絶対的に縛らず、人間が完全無欠に志向することを許す種類のものである。

そして、人生に対する無常観が最も好適な表現方法として採ったのが、《諷刺》と《憐憫》であった。世界と人生の無常を認識し、人間に対して共感と愛を抱く時、《諷刺》と《憐憫》が生れる。《諷刺》と《憐憫》によって、無常観にまといつく悲惨さが緩和され、共感と愛情に温雅が付加される。即ち、無常観の持つ切実さがデイレツタンティスム

22) A・France: Livre de mon ami, Calmann-Lévy, 1885, P.164

に包まれている。

Anatole France の文学世界の特性の起因となっている他の要因は美意識である。  
彼は芸術家の任務を次の如く述べている。

《L'artiste doit aimer la vie et nous montrer qu'elle est belle. Sans lui, nous en douterions.》<sup>23)</sup>

この作家にあっては、人生を愛しその美しさを呈示するという芸術家の一般性のみならず、美意識が独特の意義を持ち、彼の文学発想に作用を及ぼしている。

《La souffrance et l'amour, voilà les deux sources jumelles de son inépuisable beauté.》<sup>24)</sup>

世界と人間は無常であるが、その中で苦悩と愛に生きる人間を、美意識に支えられて、人間的な視線で以って洞察している。

この美意識は、認識作用の内化、外化へ志向している。

情念の精華と推進力もこの美意識に支えられており、殊に、作品 *Thaïs* に於ける悪魔主義的とも見受けられる描写はこのことを証明している。

彼の美意識は、情念のみならず、理念とも結び付いている。それは、人間の精神の自由を保障し、ユマニズムから醸し出された人間美である。 *Sur la Pierre Blanche* 中の《Fédération européenne》の住人が、《D'ailleurs nous n'avons pas honte de céder au désir. Nous ne sommes pas hypocrites.》と公言出来る時、理想社会で磨かれた最高の人間美がある。

これを文学経歴上から見れば、彼は、詩美から小説美、形式美から内容美に移っている。

彼の美意識の精髓は、温雅で寛大なユマニズムに支えられた人間美にある。

彼が、人生と事象の無限の意識に目覚め、その反面、人生の夢幻視を許しているのも、この美意識が作用しているためである。

人間の心の深淵に対して目覚めながら、これを美意識で覆ってしまったのであり、このことが、彼の文学をパスカルや自然主義文学と異質のものにしている。

しかし、この美意識自体も、相対主義思想の洗礼を受けていた所に、複雑性がある。

《Sans doute la laideur est laide et non pas belle; mais si tout a fait beau, le tout me serait pas beau.》<sup>25)</sup>

Anatole France の文学は、この二要因支えられて、人生讃歌を謳っている。

(完)

23) A・France: *Jardin d'épicure*, Calmann-Lévy, 1894, P.25

24) A・France: *Jardin d'épicure*, Calmann-Lévy, 1894, P.43

25) A・France: *Thaïs*, Calmann-Lévy, 1966, P.121